
白鬼夜行

Hank.Wott

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白鬼夜行

【Nコード】

N4288S

【作者名】

Hank・Wott

【あらすじ】

杜に棲むという鬼。

吹雪を呼ぶ異形にまつわる、伝説。

その杜には鬼が棲む。

悴んだ両掌に雪が降る。

月までも呑み込んだ暗天。一寸の光すら差し込まない杜で、それでも辺りは真昼の様に明るい。突き刺すような淡色が、網膜を白く焼いているのだった。

あまりにも全てが見え過ぎて、何もかも見失ってしまったかのような錯覚。帰る路も、進む路も、同じく行き場を失くした冷たい雪を掬い続ける両の手も。

彼以外、足跡一つない雪面は何より滑らかで、優しかった。このまま倒れて永眠ってしまおうとさえ思った。それほどまでに、全ての感覚を手放してしまいたいほどに、その杜は美しかった。

もう一步も進めそうにない。何も見えない。彼は安楽な方へと眼を閉じようとする。その刻、

ざん、と雪が鳴った。

或いはそれは彼自身が膝を突いた音だったのかもしれない。しかし彼は、確かに其処に一人の少女を見た。

まるで一切の重さがないかのようだ。雪面に存在を刻み付けることもなく、立っている。吐く息さえ凍て付くような寒さだというのに、雪を踏む裸足の足には何も履いていなかった。

嗚呼、彼女は、鬼だ。

口づてに語られる伝承。吹雪に紛れて人を攫つては凍え死なせてしまふという、悍ましい鬼の棲む杜。

確信は、必ずしも恐怖に直結しはしなかった。代わりに彼は狂喜した。たとえ人を喰う鬼であったとしても、少なくとも彼女の瞳に、吐き棄てるような憎悪の色はなかったのだ。それが彼女の存在名称に起因するものであるならば、寧ろ、その倦むべき悪命を歓迎すべきであつた。

彼はそつと、彼女へ手を差し延べる。

切実なまでの同族意識がそうさせたのだ。

「駄目だ」

ふるふると、彼女が首を振る。

「未だ、吹雪が来ない」

白い指が恨めしげに天を指す。いつの間にか雪は途絶え、雲間に蒼い月が覗いていた。

「君は、すぐに杜を出ないといけない」

彼の頬に彼女の手が触れる。直後、互いに痛みを覚えて声を上げた。

触れ合うには、彼女の手はあまりに冷たく、彼はあまりに熱を帯び過ぎていた。

「君は、」

今度は注意深く着物の袖を掴んで、立ち上がることを促すように強く引いた。

「すぐに杜を出ないといけない」

そればかり、彼女は繰り返した。

杜と郷とを分かつ境界の沢。凍り付いた水脈の彼岸で、そこから一步を踏み出すことなく、彼女は立ち止まった。

「此処までだよ」

ぱっと手が放され、支えを失くした彼の腕は力無く落ちる。僅かに凍り付いた袖先が砕けて澄んだ音を立てた。

「また、逢える？」

彼の言葉に黙って首を傾いだ彼女の瞳は、杜の闇を含んだように暗く、円い月を浮かべていた。

「また、逢える」

紅く濡れた唇が呟いた。硝子の鈴が風にひび割れたかのような音で。単に、それは彼の言葉を繰り返しただけかもしれないが。

その数日後、遅く訪れた吹雪に紛れて、郷の子供が攫われたと聞いた。

何故、自分でなかったのか。

以来、彼女は唯一彼の生き甲斐となる。

人と鬼を分かつ沢が流れ、また凍り、世に幾度目とも知れぬ冬が訪れる。

鋭利な風が刺す度、古びた社は不穩に軋む。今宵の様に月も無い雪の夜には、張り詰めた空気を震わせて、獣も樹々もより一層高く鳴くのだ。

彼は、こんな夜が嫌いではなかった。郷の者は気味悪がつて杜に近付こうとさえしないが、居心地の悪い集会所の囲炉裏傍よりは、沢からの風に吹き付けられる古社の床の方が幾分かマシだった。

「確か、あの日もこんな夜だったな」

みぞれ混じりの雨に病身を打たせた母親が風邪を拗らせて逝き、その雨がすっかり雪に変わる頃には、擦り切れた草履の足で沢の水面を踏み砕いていた。

静寂の杜は、雪を踏みしだく足音さえ喰い尽くして彼を受け入れた。全くの無音。降り積もった微小な結晶は、やがて生命という存在までも麻痺させてしまう。

いっそ、感情という感情が総て凍り付いてしまえば良かったのだ。そうすれば郷の迫害に、少なくとも無色透明な微笑みを浮かべるくらいは出来ただろうに。

母親は元来此処の生まれではない。彼を身籠ってこの郷へ辿り着き、当面の住居代わりに宛てがわれたこの社で彼を産んだ。

父親など最初から無かったのだ。郷人の言を借りるとすれば、母親

のまぐわったのは鬼か物怪か。おおよそ身体を結ばずに子を成す類の者だった。

「今更、恨みに思っても仕方がないさ」

背骨まで至る床の冷たさに身を預けたまま、天井を仰ぐ。何にせよ、自分は産まれたのだ。母親と、父親によって。

ふと、社の木戸を叩く音が聞こえた。この雪の中、彼を訪なう人があるとも思えない。薄闇の底で身構えたまま、しばし彼は沈黙した。再び木戸が規則的に揺れた。風のせいと言っわけではない。この際、相手が化け物でも酒を酌み交わしたいような気になって、半ば自棄に、彼は内錠を外した。

扉は少しだけ、ちょうど猫が一匹滑り込めるかどうか、程度開いた。そして実際、身震いして一足目を踏み入れてきたのは、雪に塗れたように白い毛並みの猫だった。

「どうしたんだい？こんな酷い夜に、家を逃げ出してきたのかい？」
飼い猫と見るのが妥当に思えたのだ。それ程に、濡れた毛並みは汚れもなく艶やかだった。

「おれと同じだな」

そ、と撫でてやると、掌へ顔を擦り付けてみゃあと鳴いた。

「寒いだろ？おいで。社で火は焚けないけれど、こうしていれば温かい」

氷のように冷え切った身体を冷えた身体で抱きすくめて、その肌の冷たさに一瞬、怯えたように猫は身をよじった。

「大丈夫、おれは平気だよ」

尚も猫は抗っていたが、彼に折れる気がないとわかったのか、すぐに大人しくなった。

夜は更けていく。朝までには吹雪になるだろうと郷長は言ったが、社は不気味な程静かに白い侵食を甘受していた。

「ん？」

頬に冷たいものを感じて、うたた寝に閉ざしていた眼を開ける。形のいい白い耳がひくひくと、眼下で震えていた。彼が目覚めたのに

気付かないのか、恐る恐るといった様子で猫の舌先が肌に触れる。どうやら、冷たいと感じたのはこのせいらしい。

「その痣は、だいぶ古いものなんだよ」
びくり、と猫が身を引いた。

「遠い昔に、未だ子供頃の話さ」
幼子の掌ほどの火傷痕が彼の頬に刻まれているのだ。猫はそれを舐めていた。

また、逢える。

そう呟いた唇の鮮やかな紅色を、未だ、鮮明に覚えている。触れ合った肌の、灼け付くような痛みと共に。

彼の身体は体温を失っていく。対称的に、彼女は身を蝕む熱に浮されていた。それでも、振り解いてしまうには余りにも彼の腕は優しかった。

凍えた呼吸は時折、安らかでない微睡みに吞まれてしまう。その度彼女は彼の指に、腕に、甘く歯を立てた。

この姿ならば、少なくとも傷付け合うことはないのだ。緩やかに生命を奪い合いながらも、焼ける痛みを感じることは。

ふい、と前脚を上げる。彼の頬の傷痕に、焼け爛れた手が触れた。

痛みは、ない。

吹雪は未だ遠い。しかし明け方には、彼女は郷へ向かうだろう。幼い子供たちは吹雪の中跳ね回る白い猫に魅せられて、禁じられた柱へと踏み入れてしまうのだ。

彼が小さく身じろいだ。凍り付いた心臓は僅かながら拍動を繰り返してはいたが、蒼ざめた唇に呼吸は薄かった。彼女は宥めるようにその唇を舐めた。

熱くは、ない。

いや、寧ろ、

温度が、ない。

吃驚したように彼の腕を飛び退いた。ところが、床にふわ、と着地することはかなわなかった。気付けば後脚は熱に侵食され、既にその形を失くしていた。

杜に生命の有る限り、成る程、彼女は保たれよう。本性は杜に宿る鬼、雪を紡いだ仮衣など失われようと、彼女という存在は依然存在のままだ。

しかし、彼は…

血の代わりに水を流して、彼女は一步、彼へと近付いた。存在までも溶かしてしまうような熱に冒されながら、いつしか猫の姿は失われ、白く凍てついた少女が其処に居る。

「また、逢えた」

触れれば、彼は彼女の指先を焼く。しかしその痛みも遥かに小さく、僅かになっていた。

「もう、逢えない？」

彼女はそっと、彼へ手を差し延べる。

切実なまでの同族意識がそうさせたのだ。

「ユキ…」

喘ぐように微かな呼吸で、彼が微笑う。それは戸外に降り積もる純白を指す様にも、彼女を示す名前の様にも聞こえた。

「ユキ…」

彼女が差し延べた手に、彼が手を重ねた。

「おれを、攫ってくれないか？」

「駄目だ」

ふるふると、彼女が首を振る。

「人はすぐに死んでしまう。そうならば、ぼくは、また独りだ」

遊び相手に人の子を攫っても、所詮、摘み取られた花の生命だ。杜の寒さの中では、どんな者も長くは生きられない。

だから、攫わずにおいたのだ。

賢明な眼をしていた。人郷にあれば、恐らく彼女に取って喰われることもないだろうと。

彼が居る限り、少なくとも彼女は独りではなかったのだ。冬の度、沢の彼岸から、社で一人棲む彼を眺めていた。

「大丈夫」

既に感覚の失われた手が、彼女の頬に、頬を伝う雫を捉えた。

「おれは、お前を独りにはしないよ」

それは確信。彼は彼女の存在に濡れた指先をその口に含んだ。

「たとえば、この身が異形となろうとも」

今更、人でなくなつたとて、何を失うと言つのだろうか。もしかして唯一の生き甲斐を、これっきり見失つてしまふかもしれないことに比べれば、他に憂うべきことなど何一つありはしないのだ。

「ユキ」

その刻、開いたままの木戸の隙間から、質量を伴つ白い風が吹き込んだ。

吹雪だった。

雪深い山郷の伝承。

吹雪に紛れて村を訪れ、子を攫つていつてしまふつが番い鬼。

その姿は白猫とも白狐とも言われ、追つて杜に踏み入れれば生きては戻れない。

雪鬼ゆきとも、白鬼びやくとも称す。

『虚蝶怪伝承録 第七卷』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288s/>

白鬼夜行

2011年10月7日15時47分発行